

聖書：マルコの福音書 8：22～30

説教題：わたしをだれだと言いますか

日時：2025 年 11 月 23 日（朝拝）

イエス様と弟子たちはベツサイダに着きます。ここはガリラヤ湖北岸の、やや東寄りの町です。すると人々が目の見えない人を連れて来て、イエス様にさわってくださいと懇願しました。イエス様はその人の手を取って村の外へ連れて行きます。そして彼が癒やしを必要としている部分に唾を付け、癒やしを行われます。これと似た記事を私たちは最近読みました。2 回前の 7 章 31～37 節です。そこで人々は耳が聞こえず、口のきけない人を連れて来て、手を置いてくださるようにと願いました。イエス様はその人だけを群集から連れ出し、ご自身の唾を付けて癒やされました。その記事と深い関係がありそうです。そしてこれとセットで考えると、このメッセージの重要性が浮かび上がって来ます。どちらも旧約聖書において、やがてメシアによってもたらされる特別な祝福として預言されていました。イザヤ書 35 章 5～6 節：「そのとき、目の見えない者の目は開かれ、耳の聞こえない者の耳は開けられる。そのとき、足の萎えた者は鹿のように飛び跳ね、口のきけない者の舌は喜び歌う。」 2 回前に見たのは耳が聞こえず、口のきけない人の癒やしでした。今日の箇所は目が見えない人の癒やしです。こうして二つの記事は、イエス様こそ旧約聖書が預言した約束のメシアであることを指し示しています。このイエス様において約束の神の国は到来し始めています。イエス様は様々な苦しみの下にある私たちを本来あるべき姿、神が意図された素晴らしい状態へ回復してくださる救い主であることが示されています。

しかし今日の記事には特別な特徴があります。それは癒やしが二段階で進行したことです。なぜそうだったのでしょうか。イエス様は一度目は失敗したのでしょうか。あるいは、それほどこの病は特別に重かったのでしょうか。そうではありません。イエス様は一度で完全に治すことができますし、他の箇所ではそのようにされています。つまり今回は意図的にこうされたと思われます。イエス様は最初に彼の両目に手を当てた後、「何か見えますか」と尋ねました。この問い自体とてもユニークです。イエス様は結果がどうなるか分からない、あるいはそのことに不安を持っているということはありません。ですから「何か見えますか」「うまく行きましたか」と尋ねることは普通ありません。つまりこれはイエス様が最初から完全な癒やしを意図しておられなかったことを暗示しています。彼はこの問いに対して「人が見えます。木のようですが、

歩いているのが見えます」と答えました。彼は見えていないわけではありません。ですから今や「目が見えない人」ではありません。しかしだからと言って「見える」と断言することもためられます。彼は今や「見えない人」ではありませんが、だからと言って「見える人」でもないのです。何かが見えており、人のようだとは分かりませんが、ぼんやり見えているだけです。そこでイエス様は再び彼の両目に手を当てられました。すると今度はすっかり目が治り、すべてがはっきり見えるようになりました。

ここにどんな意味があるのでしょうか。多くの学者は、これは象徴的な意味を持つ奇跡だと見ています。それはこの箇所が置かれている位置、文脈に注目する時に浮かび上がって来ます。前回、弟子たちの無理解が記されました。イエス様は 17 節以降で「まだ分からないのですか、悟らないのですか。心を頑なにしているのですか。目があっても見ないのですか」と語られ、最後の 21 節で「まだ悟らないのですか」と言われました。そのような霊的な意味で目が開かれていない彼らの目が癒やされるという意味がここに込められているということです。奇跡がこのような比喩的意味を伴うことはしばしばあります。この後 11 章で、いちじくの木が枯れる奇跡をイエス様は行われますが、それは実を結ばないイスラエルにさばきが臨むことを比喩的に現すものでした。またこれまでに見た五千人の給食、四千人の給食もそうです。それらは目の前にいた人々の現実的な必要を満たすものであったと同時に、メシアによる終末的祝宴を指し示すものでもありました。今日の箇所ではイエス様があえて二段階でみわざを行われたのは、目の見えない人のためにもなることですが、それは主に弟子たちへの教育的目的があったからだ多くの学者たちは述べています。霊的に目の見えない者たちを、このように段階的に癒やしてくださるイエス様を表している。

このことは続く記事とも深く関係します。そこで今日は 27～30 節も一緒に取り上げました。イエス様と弟子たちはピリポ・カイサリアの村々へ出かけられました。ここはヘルモン山のふもとにある、イスラエルと異邦人の境界地域です。イエス様は弟子たちと大切な時を過ごすため、群衆から離れ、この地方へ向かわれたのでしょうか。ここでイエス様は「あなたがたはわたしをだれだと言いますか」と尋ねます。これは先の癒やしにおける「何か見えますか？」に対応します。まずイエス様は「人々はわたしをだれだと言っていますか」と弟子たちに問います。すると彼らは「バプテスマのヨハネだと言っています。エリヤだと言う人たちや、預言者の一人だと言う人たちもいます」と答えました。これは 6 章 14～15 節と同じで、人々の評価は変わってい

ません。変わっていませんが、人々がイエス様を高く評価していたことが伺えます(もちろん本来のあるべき評価からすれば低いと言わざるを得ませんが、それでも普通の人間以上に高く評価し続けていたことが伺えます)。

この問いの後で、イエス様は最も大事な問いを弟子たちに向けられました。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか」。これはまさに「あなたがたは何か見えていますか」という問いそのものです。これに対して 12 弟子を代表してペテロが答えます。

「あなたはキリストです。」ここに彼らの霊的な目を開けてくださるイエス様ののみわがが示されています。「まだ悟らないのですか」と言われていた弟子たちが、ここで悟り始めています！このペテロの告白は特別な重みを持っています。イエス様をキリスト、すなわちメシアと言いつづけているのは 1 章 1 節の表題以来初めてです。イエス様が神の子キリストであるというイエス様の本質を言いつづけていたのは、1 章 1 節の「神の子イエス・キリストの福音のはじめ」という表題の後、イエス様の洗礼の際に父なる神が天から語られたことば、「あなたはわたしの愛する子」という 1 章 11 節、そして悪霊たちによる「あなたは神の聖者です」(1 章 24 節)、「あなたは神の子です」(3 章 11 節)という言葉のみです。人間はまだ誰もそのようなことを言っていません。ペテロが最初です！

「キリスト」とは、欄外にある通り、ヘブル語の「メシア」に相当し、「油注がれた者」という意味の言葉です。旧約では王、祭司、預言者が任職される時に油注ぎが行われました。これは神に選ばれた器が、その奉仕に身を献げるにあたり、務めを成し遂げるための力を神から受けることを象徴します。そのように神から遣わされ、旧約聖書全体に預言された神の救いを成就する約束の救い主を指す言葉としてこの言葉は理解されるようになっていました。その称号をペテロはイエス様に当てはめたのです。私たちはすでに 1 章 1 節の表題を読み、また聖書全体からイエス様はキリストであると教えられていますから、そのように知っていますが、当時のペテロたちは私たちのような情報は持っていません。ただ自分たちの目で見聞きし、悟るしかありませんでした。そんな中、ついに彼らはこの告白に至ったのです。あの霊的に鈍かった彼らが！です。それはまさにイエス様の忍耐深いお導きによることでした。振り返ると、イエス様は決してこの告白を急がせませんでした。「ご自身はだれであるか」を早く問い、早く答えさせようとはされませんでした。まず弟子たちとともに時を過ごし、彼らが良くご自身を見て、経験し、自ら確信するよう導かれました。その途中では前回

見たように「まだ悟らないのですか」と嘆かれる時もありました。しかしついに時が満ち、イエス様は「あなたがたはわたしをだれだと言いますか」と問われたのです。そしてペテロは見事に「あなたはキリストです！」と答えました。これはまさにイエス様が彼らの霊的な目に手を置き、彼らを癒やしてくださったみわざそのものです。彼らはついに目が開かれて悟り始めたのです。

しかしながらこのペテロの告白も、まだまだ不十分なものであったことが次の箇所でも明らかにされます。今日の箇所と次の箇所はマルコの福音書の分水嶺とも言われる部分です。ペテロによる「あなたはキリストです」という告白を受けて、イエス様はここからご自分が受ける受難について語り始めます。こうしてこの福音書は後半部へと入って行きます。そしてその途端、ペテロはイエス様の言葉を否定し、イエス様から「下がれ、サタン！」と言われてしまいます。つまり「見えた」と思ったが「まだ見えていなかった」ということです！確かに見え始めてはいます。しかしまだ十分には見えていない。ぼんやりと見えているに過ぎない。まさに前の奇跡で一度目に手を置かれた人の状態のようです。

ですからイエス様は 30 節で、ご自分のことをだれにも言わないようにと彼らを戒められました。「イエス様はキリストである」と伝えても、人々は簡単に誤解するでしょう。自分の勝手なイメージでイエス様を捉えて盛り上がり、かえって本当のイエス様から離れてしまいます。その誤解は信仰の妨げになります。人々だけではありません。弟子たち自身もまだ良く分かっていないのです。そんな状態で伝え始めれば聞く側も語る側も混乱するだけです。イエス様は次回 8 章 31 節から始まるこの書の後半部で、ご自分の受難について語って行かれます。こうして弟子たちはキリストとはどういうお方なのか、そのメシア理解を修正され、正しいものへと整えられて行きます。これはイエス様が再び彼らの目に手を当てて行かれることに相当します。そこではなお長いプロセスを必要とします。しかしそうしてついに彼らの目は癒やされるのです。ついにはっきり見えるようになるのです。それはイエス様の十字架と復活を通してであり、またイエス様がやがて遣わしてくださる聖霊によってです。

翻って私たちの目はどうでしょうか。私たちの霊の目は開かれているのでしょうか。「あなたはわたしをだれだと言いますか」というイエス様の問いに、私たちはどう答えるのでしょうか。ある人は、自分はまだぼんやり見えている状態だと思うかもしれません。

せん。イエス様のことが何となくは分かる。輪郭はつかめている。しかし、人間のはずなのに木が歩いているようにしか見えなかったあの人のように、はっきりとは分からない。そのように感じるかもしれません。しかし今日の箇所は「大丈夫だ！」と励ましてくれています。イエス様が導いてくださいます。今日の癒やしの場面でもイエス様が主導権を取り、彼を最後まで導かれました。ピリピ人への手紙 1 章 6 節：「あなたがたの間で良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださると、私は確信しています。」 一度みわざを始められた方は、その完成まで導いてくださいます。ですからそのためにも、この福音書の後半部に耳を傾けて行くべきです。ここを読むことを通してイエス様に再び手を当てていただき、やがてははっきり見える者とされたいと願います。

またある人は、自分がはっきり見えるようにされた恵みを思うかもしれません。今日の箇所の弟子たちはまだイエス様の受難の意味を知らず、混乱の中にいました。しかし今の私たちはイエス様の十字架と復活を知っています。これらが私たちの罪の解決のために神がしてくださったことであることを聖書全体を通して教えられています。イエス様こそ私たちの唯一の救い主であり、この方にあって罪の赦しと永遠のいのちを私は受け、とてつもない慰めを与えられている。もしそのようにイエス様により頼み、イエス様の内に憩っているなら、それは確かに私たちの霊的な目が開かれている証拠です。それは自分の知恵や理解力の結果ではなく、イエス様が忍耐深く私に関わり、導いてくださったからです。恵み深い御手を何度となく、私の霊の眼の上に置いてくださったからです。その恵みを覚えてイエス様に感謝をささげ、礼拝したいと思います。

と同時に、私たちの現在の視力にも、なお不十分なところがあるでしょう。イエス様への信仰に導かれて、今すでにイエス様を知る恵みに生かされていますが、完全にイエス様をはっきり見る日はまだ先にあります。ヨハネの手紙第一 3 章 2 節：「愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。」 コリント人への手紙第一 13 章 12 節：「今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見ていますが、そのときには顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになり

ます。」 その日こそ、私たちが主の本当のお姿をありのままに完全に見る日です。その日に向かって私たちの霊的な視力がさらに研ぎ澄まされて行くことを私たちは祈り求めて行くべきでしょう。パウロはすでに目が開かれたエペソ教会の信者たちのために、エペソ書 1 章 17～18 節でこう祈りました。「どうか、私たちの主イエス・キリストの神、栄光の父が、神を知るための知恵と啓示の御霊を、あなたがたに与えてくださいますように。また、あなたがたの心の目がはっきり見えるようになって、神の召しにより与えられる望みがどのようなものか、聖徒たちが受け継ぐものがどれほど栄光に富んだものか」知ることができますように。ですから私たちも自らの目がさらに開かれ続けることを祈り求めたいと思います。聖書を開くたびに诗篇 119 篇 18 節の次の祈りを祈りたいと思います。「私の目を開いてください。私が目を留めるようにしてください。あなたのみおしえのうちにある奇しいことに。」

あれほど「まだ悟らないのですか」と言われていた弟子たちが、今日の箇所では進歩し、この後もさらに導かれて行きます。私たちも主のそばにあって、主により頼み、主に目を開けていただく恵みにあずかる者でありたいと願います。なおこの福音書の後半を通して、そのことを導いていただき、霊の目をさらに開かれる者へ、そしてやがての日に完全に素晴らしい主を知り、永遠にこの方を賛美し、礼拝して歩むこの上なき幸いに生かされる者へ、と導かれてまいりたいと思います。